

前向く君 遺児の希望

母犠牲エッセー つづつた生徒

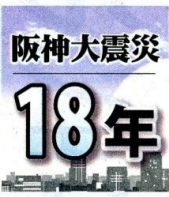
阪神大震災以来、被災者を歌声で励ますコンサートが続けてきた元中教諭が17日夜、震災で母を亡くした教え子の男性に17年ぶりに再会した。当時、男性が思いをつづつた文に心を動かされ、曲をつけて阪神と東日本大震災の被災地で歌い続けてきた。「あなたの言葉が私の背中を押してくれた」。そう感謝した元教諭は、男性から2児の父親になったと聞かされ、改めて感動の涙を浮かべた。

【藤頭一郎、米山淳】

◆宮地さんのエッセー◆

「思い出すことば」

学校の帰り、電車を待つときがある。なぜかかなしくなるときもある。大阪からかよなあかんねん、なんと思いつきもある。でも、そんな時に思い出す言葉。「おまえ、かわいそうやなあ」と言われ、おまえががんばろうと、おまえがええやろ」と言われる。



再会したのは、神戸が得意で活発な生徒だった市立本山南中の元教諭、村嶋由紀子さん(65)と兵庫県芦屋市(65)の兵庫県芦屋市(65)の同僚社員宮地成年(32)と兵庫県宝塚市。

震災当時、宮地さんは同中2年。神戸市東灘区の自宅が全壊し、母子3人(当時46歳)を亡くした。スポーツが得意で活発な生徒だったが、震災後は元気がなくなり、授業中もぼんやりすることが増え、同様の生徒は他にもおり、村嶋さんは気持ちを整理するため、震災を各自のテーマでまとめる「震災新聞」を書くよう生徒全員に提案した。

宮地さんは最初、母の死に触れられなかった。がれきの下から聞こえた母の最期の言葉は「あと五分で死ぬ」。ショックが大きすぎた。書けなかった。だ

被災者、歌で励ます元教諭 17年ぶり再会



阪神大震災翌年の卒業後、17年ぶりに再会した宮地さん(左)と村嶋さん(右)。兵庫県西宮市の県立芸術文化センターで17日午後9時6分、米山撮影

同じように親を亡くした家族です」と笑顔で東北の遺児らと一緒に報告すると、村嶋さんに歌った。「みんながは「かわいいね。命は前を向いたら周りの人つなげていって、命は元気になるよ」。その涙を浮かべた。

村嶋さんは「震災で励ましながら、お母さんを失ったあなたに家族を持ち、立派な人になってほしい」と目を潤ませる村嶋さんに、「先東北の遺児たちの希望生は変わりませぬね。感動しました」と宮地さん。携帯電話に保存していたら歳と3歳の娘の写真を見せ、「僕

歌の力で支援

被災者を歌の力で支援するコンサートが17日夜、西宮市高松町の県立芸術文化センター小ホールであった。阪神大震災後に生徒の心のケアにあたった元中学教諭の村嶋由紀子さん(65)＝芦屋市＝らが企画。東日本大震災後に出会い、交流を続ける東北の震災遺児らのメッセージ映像も披露され、約430人の聴衆は「あの日」に思いをほせ、目を潤ませていた。

コンサートは復興支援を目的に、村嶋さん

西宮でコンサート

が夫で音楽家の紀久男さん(66)らと95年秋か

が夫で音楽家の紀久男さん(66)らと95年秋か

また、交流を続ける熊谷海音さん(9)＝同

ンブル「アモーレ」(芦屋市)などの合唱団も

また、交流を続ける熊谷海音さん(9)＝同

これまで6回公演した。今回は女声アンサンブル「アモーレ」(芦屋市)などの合唱団も

また、交流を続ける熊谷海音さん(9)＝同

ら毎年開催している。村嶋さん夫妻は、東日本大震災後には岩手県陸前高田市を訪れ、仮設住宅や中学校などで

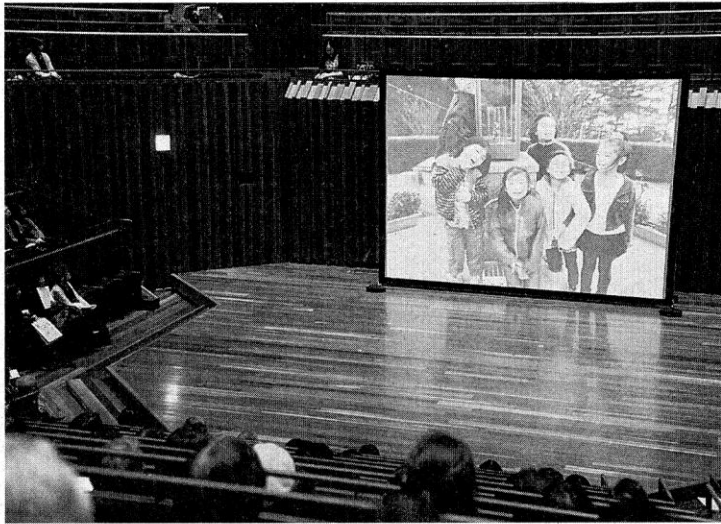
出演。日本歌曲やミュージカルなどを披露したほか、村嶋さん夫婦が復興をテーマに作った「いつだってスタートライン」などのオリジナル曲も熱唱した。

これまで6回公演した。今回は女声アンサンブル「アモーレ」(芦屋市)などの合唱団も

また、交流を続ける熊谷海音さん(9)＝同

岩手の震災遺児映像で登場

430人「あの日」思い聴き入る



コンサートで披露されたビデオ映像で、「私たちは頑張ります」と語る海音さんら

＝西宮市の県立芸術文化センターで

一緒に出演したミュージカル公演や同市にある「希望の灯り」を訪れた様子などが映され、最後に海音さんは「私たちは頑張ります」と笑顔とともにエールを送った。

村嶋さんは「子どもたちの笑顔は復興を目指す被災地の希望。来年は一緒に関西でステージに立ち、二つの被災地に届くように歌声を響かせたい」と話していた。【藤頭一郎】

毎日新聞
一月十九日 朝刊
阪神大震災
18年